

Johannes Hartlieb 宮廷の魔術師？

藤井明彦

I. ヨハネス・ハルトリープとは？

ヨハネス（あるいはハンス）・ハルトリープ（Johannes [Hans] Hartlieb）は1410年頃に生まれ、1468年に亡くなった医師および文筆家で、長年ミュンヘンの宮廷に仕えた人物である。

ハルトリープ家はバイエルン・インゴルシュタットのルートヴィヒ七世（長髯王）の従者の家系であったが、若きヨハネスは君主に才を認められ1430年代にウィーン大学に留学する。ヨハネスはその後イタリアのパドヴァ大学で1439年に医学博士の称号を得、翌年の1440年もしくは41年頃からバイエルン・ミュンヘンのアルブレヒト三世（敬虔王）に侍医および顧問官として仕えることになる。この君主夫妻（アルブレヒトとアンナ）とは住家を譲渡してもらうなど極めて近しい関係にあったようだ。1460年のアルブレヒトの死後もハルトリープは跡継ぎのジギスメントの侍医になり、1468年に没するまでミュンヘンの宮廷に仕えた。ハルトリープはその一方で、生涯に十数点の著作を著している。その内容は、主に占星術に基づく「秘術」としての運勢占いとラテン語作品のドイツ語訳に分けられるが、前者に関しては果たしてハルトリープ自身の著作かどうか、現在でも研究者のあいだで見解が分かれている。また「月占い」、「名前占い」、「点占い」、「手相術」といった「秘術」についてはそれぞれの著作で極めて詳細に述べられている一方で、1455/56年頃に書かれたと思われる『禁術全書 *Das pûch aller verpoten kunst*』では一転してそれらすべてを悪魔の奸計に基づく悪しき術として厳しく糾弾している。ラテン語作品の翻訳には『アレクサンダー大王物語』のような後に印刷本で広く読まれることになる英雄譚もあったが、『恋愛について』や『婦女の秘密』のように「秘術」的な側面を持ったものも含まれている。日本では殆ど名前の知られていない中世末期の作家であるが、ドイツ語圏の研究者のあいだでは1920年代から現代にいたるまでこの謎めいた人物をめぐる議論が続いている。

ハルトリープに帰せられる12点の著作を年代順にたどってみると、『記憶術 *Kunst der Gedächtnüß*』（1432年頃）¹⁾、『月占いの書 *Mondwahrstagebuch*』（1433年～1435年）、『名

1) 1432年頃にノイブルクのルートヴィヒ七世の庶子ヴィーラント・フォン・フライブルクのために書かれたと言われる。

前占い *Namenmantik*] (1438年～1439年), アンドレアス・カペラヌス (Andreas Capellanus) 著『恋愛について *De amore*』のドイツ語訳 (1440年頃)²⁾, 『手相占い *Chiromantie*』 (1448年), ドイツ語訳『アレクサンダー大王物語 *Alexander*』 (1450年頃)³⁾, 『薬草本 *Kräuterbuch*』 (～1450年頃), 『点占い *Geomantie*』 (～1455年), 『禁術全書 *Das pûch aller verpoten kunst*』 (1455年～1456年)⁴⁾, 『聖ブランダン航海記 *Navigatio Sancti Brandani*』のドイツ語訳 (～1457年頃)⁵⁾, ハイスターバッハのカエサリウス (Caesarius von Heisterbach) の『奇跡に関する対話 *Dialogus miraculorum*』の第2部の独訳 (1457年～1467年)⁶⁾, そして偽アルベルトゥス・マグヌスの『婦女の秘密 *Secreta mulierum*』の独訳 (1465年以後)⁷⁾ となる。

II. ハルトリープの著作と『禁術全書』の占める位置

ここで上記の著作の内容を手短かに述べる。『記憶術』は西欧の伝統的な「弁論術」の五つの分野 (「発想」・「配置」・「修辞」・「記憶」・「発表」)⁸⁾ の一つである「記憶」を取り上げて、様々な知識を整理して覚えるための具体的な方法を示している。内容は古典的記憶術の流れを汲むもので、覚えるべき文言や概念を具象的・比喩的な「イメージ」に変換し、それを仮想空間としての記憶の「場所」のなかに秩序立てて据えていく方法が説明される。なお前書きでは、この方法を他人に漏らしてはいけないという警告が述べられている。『月占いの書』は月の28の宿 (月が日々通り過ぎていく星や星座) のうちのどれに属するかに基づいて個々人の運命を占う本である。どの月の宿に属するかは、生まれた時刻と、洗礼名のアルファベットを一定の規則に基づいて数字に置き換えることによって得られる計算結果に従って決定される。『名前占い』は第I部と第II部に分かれており、第I部では決闘による裁判決着が、どの曜日に行なわれればどちら側が勝利するかを、当事者の洗礼名から予測する方法が述べられ、第II部では決闘の勝者ばかりでなく、病人が快復するか否か、ある企てがうまく行くかどうか等を、上記の『月占いの書』の場合と同じく当事者の洗礼名のアルファベットを数字に置き換えることによって占う方法が示される。その際ピタゴラス、プトレマイオス、プラトン、アリストテレス、ハリ⁹⁾ という5大権威の計算方式に基づく結果が一致することが必須とされている。『恋愛について』はフランスの宮廷付司祭アンドレアス・カペラヌスの「*De amore*」のドイツ語訳で、ある貴族の若者に対して著者が、愛とは何か、愛は如何にして増大するか、また如何にして減少して消滅するか等々について語るもの。平民の／貴族の／大貴族の男性が平民の／貴族の／大

2) オーストリア公アルブレヒト六世の依頼による。

3) アルブレヒト三世と妻アンナ・フォン・ブラウンシュヴァイクのために翻訳されたもの。

4) 辺境伯ヨハン・フォン・ブランデンブルクのために執筆された。

5) アルブレヒト三世の妻アンナ・フォン・ブラウンシュヴァイクのために行われた。

6) ミュンヘンの市参事会員ハンス・ピューテリヒの求めに応じたもの。

7) アルブレヒト三世の息子のジギスムントの願いに応じたもの。

8) Vgl. 桑木野幸司:『記憶術全史—ムネモシユネの饗宴』(講談社, 2018年), S. 19-20.

9) ハリー (Haly) はアラビア系の学者だと思われるが、未詳。

貴族の女性の愛を得るためには如何に話しかけ、如何に会話を進めていくべきかという、総計で9つのパターンの一種の模範会話例が中心になっているが、最後の巻では、恋愛に労力を傾けるのは浪費に他ならないので、恋愛の諸相を知り尽くした上でそれを避けるのが最上だという忠告がなされる。『手相占い』は「木版本Blockbuch」の図版集で、見開きの右側に男性の、左側に女性の手が総計で44枚描かれており、それぞれの手に現れる「印」とそれについての解釈がその図版に書き込まれている。記されている内容は健康状態、気質等に関するものが多いが、それらに起因するその人の運命・宿命についての言及もある。『アレクサンダー大王物語』は、古代から数多くの伝記類によって伝えられているマケドニアの王の生涯を描いたものだが、ハルトリーブは参照したと思われるラテン語原本に物語としての生彩を添えるための拡張を施しており、量は3倍近くに増えている。大王の遠征先のオリエントの地勢や風物が詳細に描写されるとともに、占星術に関する詳細な言及が特徴的である。『薬草本』は11種類の動物と162種類の薬草を取り上げて、その処方仕方と効用を記した本である。獅子の脂肪、鹿の肉や角、狼の血液や心臓などといった動物とその部位に関する薬効が述べられた後で、薬草の処方仕方と効用が、Ambra（フウ [楓]）、Angelica（アンゼリカ）、Abrotanum（ヨモギ）…からZisania（ドクムギ）、Zinciber（ショウガ）までアルファベット順に記されている。『点占い』では、自分が知りたい事柄に心を集中して、石あるいは砂に任意の数の点を右から左に向かって打ち、それを4回行い、それぞれの列の点の数が奇数か偶数によって決まるパターン（全16種類）に基づいて占いを進めていく方法が紹介される。解釈は主として占星術の三大要素の一つである「ハウスHimmelsorte」を適用して行われる。『禁術全書』は上記の「名前占い」、「手相占い」、「点占い」を含む7つの占術（黒魔術、点占い・土占い、水占い、空気占い、火占い、手相占い、肩甲骨占い）をすべて、人をたぶらかして罪に陥れようとする悪魔の奸計によるものだと強く非難している（この著書については後に詳しく述べる）。『聖ブランダン航海記』は、背中に森の生い茂った大魚の存在や裏切者のユダが土曜日だけは地獄の責め苦を免れること等、神の不思議な御業が記された書物を信じるに値しないとして火中に投じたアイルランドの修道院長ブランダンをめぐる物語。そのブランダンに天使が現れて、神の奇跡を自らの目で確かめるために出航せよと命じる。12名の修道士とともに出航したブランダンは9年間の航海のうちに神の数々の不思議な業を目撃する。帰港した彼は見聞の記録を本にまとめて神に捧げ、昇天する。『奇跡に関する対話』は、ジーベンゲビルゲ地方のハイスターバッハのシトー会修道院の修練長カエサリウスが、若い修練士の教育のために編纂したラテン語の例話集（成立は1219年～1223年）。ハルトリーブは第2部に該当する第7巻～第12巻に収められた414編の例話を翻訳している（第7巻：聖母マリアについて、第8巻：様々な幻視について、第9巻：キリストの肉と血の秘蹟について、第10巻：奇跡について、第11巻：死にゆく者たちについて、第12巻：死者たちへの報いについて）。多くの注釈や説明を加え、読み物としての文体上の工夫を施した翻訳はラテン語原文を量的に大きく上回っている。『婦女の秘密』はアルベルトゥス・マグヌスの名前で伝わる「*Secreta mulierum*」に他の類書の記述を加えて翻訳

しまとめたもの。土星、木星、火星等の各惑星のもとで生まれる子供の特徴や、黄道十二宮が人体の各部位に与える影響についての記述が多くを占める「占星医学書」だが、母胎における胎児の成長についての説明、妊娠中の子供の性別を知る方法、また不妊の治療法などの実際的な事柄についての記述もある。

このようにハルトリーブの名前で伝わる著作の内容は多岐に渡る。成立時期は1430年代から1460年代にかけてだが、その中での「転回点Wendepunkt」と言われているのが1455年～1456年頃に著されたと考えられる『禁術全書Das pûch aller verpoten kunst』で、ハルトリーブはここで、それまでの著作で詳細に実践法を述べて来た「名前占い」、「点占い」、「手相術」といった「秘術」を、軽率で素朴な者たちを騙して味方に引き入れるために悪魔が編み出した忌まわしい術だとして厳しく非難している。ハルトリーブがこのように従来の考え方を大きく変えたのは、その頃に枢機卿としてドイツ南部を訪れていたニコラウス・クザーヌスの教えに触れたためだという解釈もあれば、むしろこれがハルトリーブの本来の考え方で、「名前占い」、「月占い」、「点占い」などの本は忌まわしい術の実情調査のために集めていた資料で、彼自身の翻訳（ラテン語からの）でもなければ著作でもないという捉え方もある。ここではこのハルトリーブの「転換」について考えてみたいが、まずは『禁術全書』の構成と内容を考察する。¹⁰⁾

Ⅲ. 『禁術全書』の構成と内容

ハルトリーブは1455年から56年にかけてニュルンベルクに滞在していたが、それはアルブレヒト三世の息子ジギスムントとブランデンブルク選帝侯フリードリヒ二世の娘との結婚の仲介をするためで、そのフリードリヒ二世の弟である辺境伯ヨハン・フォン・ブランデンブルクの元に滞在していた。この伯は「錬金術家」という異名もあったほどの秘術好きで、この望ましくない嗜好を諫めるためにハルトリーブは『禁術全書』を執筆したと言われている。

『禁術全書』は第1節から最後の第132節まで連続した形で書かれているが、内容的には「7つの禁じられた術」について述べる第22節から第132節（以下、第Ⅱ部と呼ぶ）とその前段にあたる第1節から第21節（以下、第Ⅰ部と呼ぶ）に分かれている。

1. 第Ⅰ部

第Ⅰ部は、本書全体の前置き（第1節～第2節）、7つの問いとそれに対する答え（第3節～第11節、第19節）、上記の『奇跡に関する対話』で語られているある例話の紹介（第12節～第16節）、この書の直接の読者である辺境伯への語りかけ（第17節、第18節、第20節、第21節）から成っている。

10) テキストには Johannes Hartlieb. Das Buch aller verbotenen Künste, des Aberglaubens und der Zauberei. Herausgegeben, übersetzt und kommentiert von Falk Eisermann und Eckhard Graf. Ahlerstedt 1989を使用した。

前置きでハルトリーブは、伯は秘密の知恵にも興味をお持ちだが、惜しむらくはラテン語に不案内でいらっしやる、そのせいで伯が魔術に取り込まれてしまったら嘆かわしいことなので、それを防ぐために以下に7つの禁じられた術、更にはその他のものについてまとめて記す、それらは自分が話に聞いたり実際に見たりしたものである、と言う。

次に、神の書に通じる者たちの責務とは以下のような事柄を明らかにすることだとして、7つの問いとそれに対する答えを挙げる¹¹⁾。問1：悪魔は幻影を使って人々を善行あるいは悪行に駆り立てることが出来るか？〔答1：悪魔は人の魂や理性の中に何物ももたらすことは出来ない。〕問2：悪魔はそもそも善きことへと人を導くのか、その場合人は悪魔に従うべきか、悪魔の奉仕を受け入れるべきか？〔答2：聖書は何人も悪魔の忠告、助け、奉仕を受け取るべきではないと言っている。〕問3：如何にして悪魔は思慮のない人間をだまし、その財産を奪い、唆しあざむくのか？〔答3：人が同意をしない限り、悪魔は人を欺くことはない。〕問4：悪魔は人の考えを知って理解するのか？〔答4：悪魔には人の考えを知ったり理解することは出来ない。〕問5：悪魔は先の事を知ることができるのか？〔答5：聖書によれば、悪魔から取り上げられているのはその自然の性質ではなく、神の恵みである。¹²⁾〕問6：悪魔が善事への忠告をした場合、人は悪魔に従いその奉仕を受けるべきか？〔答6：聖書学者たちは、何人も悪魔の忠告や援助を受け取るべきではないと言っている。〕問7：如何にして悪魔は人心を手中にし、その心を誤らせるのか？〔答7：悪魔は誰の心も強制できないが、人を誘惑して人が同意すると、その人が気に入ることをでっち上げてそれを教え込むのだ。〕

なお、この問6と問7のあいだには上述の『奇跡に関する対話』の第5巻、第36章で語られているある例話（敵に迫られた主君を川に浅瀬を作って敵から逃れさせ、医者に余命は一日と宣告された主君の重病の妻には「雌ライオンの乳」を遠く離れたアラビアからわずか数時間で持ち帰って来た優れた従者の正体が実は悪魔であったことが判明するという話）がかなり長く5節に渡って紹介されている。

最後にハルトリーブは「伯よ、悪魔の術から身をお離してください、神があなたに与えた人一倍の能力を発揮なさって下さい、殿下はよき家臣、よき土地、よき臣民をお持ちです、殿下は高貴で自然な術に関する知識も人一倍お持ちです、どうぞ悪魔の誘惑を振り捨て、まやかしから身をお離してください」と訴える。そしてそのすぐ後に「しかしながら私は黒魔術とされる7つの禁じられた術のあとで、神とキリスト教の正しい教えに背く83の術についても述べましょう」¹³⁾と続けている。「伯がそのまやかしを見破る手助けとなるように」といった文言を挿入してこの間の矛盾を解決しようとしている現代ドイツ語訳¹⁴⁾

11) テキストに番号が付されているわけではないが、以下のように整理できる。Vgl. Fürbeth (1992), S. 114-116 (註18参照)。

12) 文意がはっきりしないが、先の事を知ることができるのは神のみであるという含意だと考えられる。

13) „Yedoch will ich dir nach den sibem verboten künsten, die man nembt Nigramanticas, drey und achtzig beschreiben, die all wider got und rechten cristenlichen glauben sind.“ 註10のテキストのS. 32.

もあるが、真摯に警告しながら、その秘術については7つに加えて83も述べるという2つの態度が折り合いもせず隣接しているのが印象的である。

2. 第Ⅱ部

第Ⅱ部では7つの禁じられた術が順次取り上げられて詳しく説明される。以下、その内容を要約する。

1) Nigramancia (黒魔術) [第22節～第37節]

Nigramancia は黒魔術一般のことで最も悪しきものです。この術を使う者は悪魔に捧げ物をして同盟を組まなくてははいけません。そしてこの術の使い手は秘密の印の書かれた本、例えば『ソロモンの印』、『ソロモンの鍵』、『(天使と悪魔の)位階』などを使います。また呪文を暗記し、香をたき、動物を生贄に捧げます。薬草、石、魚、鳥を金属の容器に入れて混ぜると、悪魔に大きな事を要求できると言いますが、それは迷信で、悪魔自身がその中に身を隠していて騙すのです。この術に関しては『聖なる本』という書物がありますが、その本を高い山の上で聖別し、関わる者はそれに血で署名します。おまけに悪魔には46の位階があるのでその全てに捧げ物をしなくてははいけません。この本はこの術のなかで最も忌むべき本です。『奇跡に関する対話』にも、教養のないベネディクト会士が学問を習得するために悪魔が置いていった石によってパリで一番の学者になるものの、死後は無残に断罪される話が載っています。呼べばすぐに来て、短時間で何マイルも走る馬がいますが、それは悪魔に他なりません。またこうもりの血を使って *debra ebra* と唱える方法は多くの領主のあいだで一般的に知られていますが、これにも悪魔が加担しています。空中飛行もこの魔術に属しますが、特に魔女は *unguentum pharelis* という塗り薬を使います、それは7種の薬草から出来ていて、それぞれ決められた曜日に摘まれなくてははいけないのです。それに鳥の血と動物の油を入れて塗り薬を作るのですが、しかしこれ以上詳しくは申しません。それをベンチや椅子や熊手や暖炉の火かき棒に塗って飛んで行くのですが、これは厳しく禁止されていることです。ローマで1432年に私が見聞きしたことです。猫に姿を変えて多くの子供を殺していた男女がいたのですが、ある父親が自分の子供を襲った猫の頭をナイフで刺したことがありました。翌日に近隣のある女が死の床だったのでその父親が見舞ったところ、「あんなことさえしてくれなければ…」と言われたそうです。その女は後に市参事会の前で、魔女の塗り薬があればすぐにここから飛んで行くのに、と言ったことがあります。私も他の者たちも塗り薬を与えたらどうなるかを見たかったのですが、ある学者が塗り薬を与えたら悪魔は大闘争を仕掛けるかもしれないと言ったので、その女は結局が火刑になりました。また電や雷を降らすのもこの術で、この術に長けているのは神に背いた老婆のみです。更にもう1冊注目すべき本があるのですが、それは『ピカトリクス』です。これはこの術での最も完璧な本で、スペイン王のために編纂さ

14) „um Dir zu helfen, diese Trügereien zu erkennen“. Johannes Hartlieb: Das Buch aller verbotenen Künste. Herausgegeben und ins Neuhochdeutsche übertragen von Frank Fürbeth. Frankfurt a. M. 1989. S. 34.

れたのですが、明らかに教養のある学者の手によるもので、どんなに教養のある方でもこの本に書かれていることは罪ではないと思ってしまうかもしれません。『三聖王の書』という本もあります。ここでは魔術が素晴らしい知恵と混合されていて、至るところに星辰信仰が流れ込んでいます。私でさえそれが本当に偽りや悪なのかどうか、分からなくなることがあります。更に髑髏に香をたき口ウソクを灯すと髑髏から応答があるという話もありますが、どうぞ騙されませんように、そこで答えているのは悪魔です。また息を引き取った者の霊を呼び出して、それを自分に奉仕させ、数年のあいだ身近におくという術もあります。その霊に忠誠の誓いを立てさせるわけですが、その霊は亡くなった本人のものではなく悪魔のものなのです。死後30日以内ならば死者を呼び出してその様子を聞くことができるという者もいますが、これは真偽の決定が難しい問題です。私自身は悪魔の介入を疑っています、等々。

この、Nigramanciaに関する部分（第22節～第37節）で「主君よ、どうかご用心ください」という呼びかけは10回前後行われているが、最後に、主君よ、お気を付けください、これらの術が御国で行われるのを許さないで下さい、そして水晶の球をどうか脇にお置きください、後でお話するPyromancia（火占い）に当たるので断罪せざるをえないのですと述べて、次の術に進んで行く。

2) Geomancia（点占い・土占い）[第38節～第53節]

これは未来を予言し過去を探求することが出来る術で、土や砂を乗せた板や紙とインクのような、点の数が奇数か偶数かを区別できるもので行います。アルベルトゥス・マグヌスはこれが禁術のうちで最も正当化されるものだと言っていますが、私は罪だと思えます。例えば争いでどちらが勝つかをこの術の2人の使い手に尋ねると、答は違います。また同じ使い手でも2度占えば答は異なります。これは点の数が偶数か奇数かだけにに基づいているからで、サイコロを投げるのと何ら変わりがありません。我々が自分の感覚や理性で知り得ないことは神のみに頼るべきですが、もし神以外のものに頼ると、神はこの人間の不信心ゆえに悪魔を点打ちやくじに関与させるのです。答えを曝くのは悪魔ですが、真実を言うことがしばしばあります。そうやって悪魔は人を信じ込ませ永遠の罪へと引き込むのです。神はそのようにして罪人を罰するのです。また占いの結果が2度目も同じ場合は、悪魔が信じ込ませるためにそうしているのです。主君よ、お気を付けください、「私はこれを信じているわけではなく、楽しんでいるだけだ」とおっしゃるのはいけないのです。領主のすることは正しいと臣民は思ってしまいます。事が大きくなれば、一臣民のみならず街全体が滅びてしまいます。悪魔どもは、競走や決闘などの勝者を占う方法も考え出しています。特に罪深いのは聖母マリアと信仰のために戦った戦士の聖ゲオルクをかつぎ出していることです。聖母マリアには土曜日・火曜日・木曜日が、聖ゲオルクにはその他の曜日が属し、これに基づいて誰が勝つかを決めるのです。また盗人を見つけるために行なわれるパン占い——3本のナイフで3本の十字をパンに刻み、糸巻棒をそこに固定して、嫌疑のかかっている2人が薬指で十二使徒に誓いの言葉を述べる等々——も罪のない者に嫌疑がかかってしまうのです。盗人探しには他にもチーズ占いや石鱈占いが使われ

ますが、こういった禁じられた術にはすべて悪魔が潜んでいるのです。ここまで「点占い・土占い」について申し上げましたが、これは「水占い」、「風占い」、「火占い」と並んで四大元素に従って名づけられています。悪魔の狡猾さによってこの四大がいかにも有毒となっていることでしょうか。ただし最も罪深いのは軽率で神への真の信仰を持たない君主たちです。財宝を欲しがり、他の領主の秘密を知りたがり、悪魔の技によって勝者になろうとしたり、魔法によって愛を求めたり、不和の種を蒔いたりするのです。

3) Ydromancia (水占い) [第54節～第66節]

この術の使い手は、水は神の創造したものではないと主張します。創世記には「神の霊は水の上をただよっていた」とあるので、水の中には特別な霊が住んでおり、この霊は過去の事も未来の事も明らかにすると言うのです。盗人探しや財宝探しなどの場合は、日曜日の夜明け前に3つの泉に行き、水を汲み、清潔な部屋に運んで来てその前にロウソクを立てて崇めるのです。無垢な子供を水の前の清潔な椅子に座らせ、この術の使い手はその子供の背後に立って秘密の言葉を耳打ちし、子供はそれを復唱します。その時に子供に何が見えたかを言わせるのですが、その場面には悪魔が忍び込んでいて、真実でないことを真実だと思わせるのです。私は何度もその場に立ち会いましたが、子供はこの儀式によってひどく痛手を負います。また、薬草に聖水をかけて虫を防ごうとする女たちがいますが、それは迷信です。拍車を聖水に浸して、これでどこを打っても馬の体は腫れたりしないと信じている廷臣たちがいますが、これも迷信です。女魔術師はよく水車小屋に行き、水車から空中に巻き上げられた水を溜めて、愛や敵意に関する魔術に使いますが、これも迷信です。更にはあろうことか、すべてのキリスト教徒の至福と安寧が宿る洗礼の聖水を使う悪しき者たちがいますが、その様子はここで書かれるべきではないでしょう。一方で傷を治すために水を聖別する者がいますが（そうすると傷が腫れないと信じて）、これも迷信に他なりません。聖別は教会が定めた以外の力を水に与えることはないのです。他方で薬草や植物の根から作られた水は、明らかに治療の効果があります。それはその薬草や根の持っている効用で、眼科医が目薬を作るのと同じことです。ただしそれらの水を、あたかもそうすると効果が増すかのように、特定の日に作るべきではないのです。

4) Aremancia (空気占い) [第67節～第79節]

これは空気とその中に漂うものを使う術です。これは特に異教徒のあいだで好まれていたもので、例えば朝一番に出会ったものをその日の神として崇拝するのです。不信心なキリスト教徒もこの術を使って、兎に出会ったら不幸で、狼に出会ったら幸運だなどと言っています。また、右側で鳥が飛べば幸運、左側で飛べば不運などと言っていますが、これも迷信です。この術を編み出したのはまさしく悪魔で、悪魔がその鳥に姿を変えているのです。特定の日に特定の風が吹く時だけ狩りに行く者がいますが、迷信に過ぎません。しかし狩りの名人たちは風への対処の仕方をよく知っています。風の方向に従って行われる追い出し猟は罪ではありません。更に「くしゃみ」は脳が自然な方法で自浄するためのものであるのに、それを占いの種にする者たちがいます。3回くしゃみをすれば家の周りに4人の泥棒がいるはず、2回くしゃみをすれば、その者は起きて寝返りを打つはず、13回

のくしゃみは良い印で、夜の夢に見たことがうまく実現されるだろう等々です。空にも多くの印が現われます。平民たちは龍と呼んでいます、天文学者たちは流星と言っています。流星はいろいろな形をとりますが、それは自然界の原因に基づくことです。それとは異なる見方をする者は、悪魔に唆されているのです。また迫り来る激しい嵐は裏切りの前兆だと信じている者たちがいますが、迷信です。なぜ大風が起こるのか知りたい者はアリストテレスを読むべきです。風の原因については書いてありますが、裏切りについては書かれていません。蠟などから肖像画や人形を作る女魔術師たちもいます。それに名前を唱えて野外に吊るし、そこに風が吹けば、その名前を唱えられた者はもはや安息を見出さないと言うのです。主君よ、あなたが率先して彼らを罰すれば、多くの人々があなたの手助けをするでしょう。しかし誰もそうしようとしなのは、こういった迷信を行なう者たちの多くが諸侯によって匿われているからなのです。

5) Pyromancia (火占い) [第80節～第97節]

火を焚いてそこに過去や未来の出来事を見る女と男がおります。特定の日薪を用意して、秘密の場所へ愚かな子どもを連れて行き、跪かせて火の霊に捧げ物をして祈るのです。その火の中に何が現われるかを見て占うのです。使い手の中には動物の脂肪を用いる者がいます。それを燃やすと、その煙のなかに多くの物が見えると言うのですが、悪魔のまやかしに過ぎません。また無垢な子供を膝に乗せ、手を挙げさせて指の爪を見させる、そしてその子の耳に3つの秘密の言葉をささやきながら呪いをかけます。言葉の一つは Oriel ですが、あとの2つは申しません。その子に自分たちが知りたいことを尋ねれば、答えはその子の爪に現れると信じているのです。子供の手を太陽に向かって挙げさせたり、ロウソクで手を照らして、何が見えるのかを尋ねることもあります。他にもいろいろとありますが、最もひどいものは少年が水晶を見つめ、そのなかにすべての出来事を見るという術です。きれいに磨かれた水晶ないし緑柱石を使うのです。天気の良い日にロウソクを立てた清潔な部屋を用意し、使い手は無垢な子供と共に身を清め、白く清潔な衣装を着て呪文を唱え、捧げ物に火をつけます。それから子供に水晶の中を見るように命じます。そこで、天使が見えるかどうか尋ねます。見えたら何色の天使かと聞きます。赤だったら「ああ、天使はお怒りだ」と使い手は言い、更に捧げ物をします。天使が黒ければ、「天使は非常にお怒りだ、更にロウソクをつけ奉仕しなくては」と言うのです。悪魔がもう十分だと思ったら天使を白く見せます。そこで使い手は「天使は手に何を持っているか」と子供に尋ねます。「文字の書かれた紙です」と答えたら、「文字は見えるか？」と尋ねて、問いへの答えになるまでその文字を集めるのです。また、鉛や錫を溶かして水に入れて再び取り出し、その色や形を見て過去や未来のことを占う使い手がありますが、これも迷信です。金属は熱ければ熱いほど色がつきますし、高いところから落とせばそれだけ散らばるのです。これはすべて自然の理によるもので何かを占うものではありません。

6) Ciromancia (手相占い) [第98節～第114節]

これは手を見て、過去のことや未来のこと、妻や夫や子供のこと、また生涯に何が起こるかを占うものです。指の線や掌の線、また指そのものを見て占うのですが、どうやろう

ともこれは罪で迷信です。手の線というのは皸や傷ですから、善や悪を意味することはないのです。また小指が薬指の第一関節より長ければ幸運、そこまで達していなければ不運になるなどと言いますが、指の長短は自然の原因によるものです。私は評判の古い師の女に手相を見てもらったことがあります。まず手を洗わせて乾かし、顔を手に近づけて、私の将来について語ったのですが、私が聞けば心地よいと思うようなことを言っているのが分かりました。高位の尊敬すべき人々がこの古い師を褒めるのも尤もなことです。手相を見る者は手の線の色にもこだわります。上から下に伸びる赤い線を持つ者は長生きする、線の青白い者は短命か病気だと言ったりしますが、例えば労働者の固い手に線は殆どありません。普段の仕事をしただけの時と、手を何か他のことにも使った時では手の線の様子は違いますし、赤い線は寒さで白く、白い線は暑さで赤くなり、長い線は乾きで短く、短い線は湿気で長くなります。また指の爪に出る斑点の色、円いか広いか、長いか狭いか、外側に向かっているか身体の方に向かっているかなどを見て占う者もいますが、斑点は身体の湿気から生じるもので、運や不運、死や生を意味したりはしないのです。

7) Spatulamancia (肩甲骨占い) [第115節～第132節]

私はこれ以上に根拠が怪しくばかげた術を知りませんが、この術は死んだ牛や馬やロバの肩甲骨を使うのです。肩甲骨をまずワインで、次に聖水で洗い、それを清潔な布に包みます。占う時はその肩甲骨を身体に結び付け、野外に出て、そして投げかける問いに応じてそれが変化すると信じて見つめるのです。使い手はこの方法でどんな問いにも答えられると言います。生と死、名誉と財産、富と貧困、病気と健康、農作物の値段、寒さ、雪、土地の湿乾等々です。しかしこれらは悪魔が答えを吹き込んでいるという以外、何も根拠のないものなのです。また、聖マルティンの日にガチョウを食べ、その骨を翌朝まで乾かしてそれを四方八方から眺める、それでその冬が寒いか暖かい、乾燥しているか湿っているかを判断するという術もあります。鳥や獣の様子から天候の変化を推測することは出来ませんが、それらは自然の原因によるものです。多くのガチョウが占いのために同じ夜に食べられても、それらは餌や飼育の状態がみな違うわけですから、その骨が皆同じことを意味することなどありえません。ある隊長が、今年1455年の聖ニコラウスの日に「星見であるあなた方の見解によれば今度の冬はどうなるのか？」と私に尋ねました。私は「土星は今月に火の宮に入ります、他の星もこれから3年は厳しい冬が来ない布置になっています」と答えました。そうしたらその隊長はやおらガチョウの骨を取り出し、2月2日の後は絶対に極寒になるだろうと言ったのです。プロイセンのドイツ騎士団はすべての戦いをガチョウの骨の助けを借りて戦って来た、騎士団がガチョウの骨に従う限り、大きな栄誉と名誉を手にするだろうとも言ったのです。ところが神の御恵みでこの冬はとても穏やかです。このガチョウの誤りが更に続くことを私は望みます。

『禁術全書』はこの後、悪魔は人間が真の教えよりもこのようなしるしや迷信を信じることを見て取り、軽率な人間をますます迷わせようとしておりますが、教会もそれに気づき、これらすべての秘術、魔術、迷信を火あぶりの刑に処すとして教会令で禁じました、世俗の法は更に厳しく禁じていますと述べて終わっている。¹⁵⁾

IV. 『禁術全書』の意図は？

『禁術全書』は原典に最も近いと思われる写本で78葉、ペーパーバックの現代ドイツ語訳¹⁶⁾でも百数十頁程度の量だが、ブランデンブルク辺境伯に対して禁じられた術に用心するよう呼び掛ける文言は40回近くも繰り返されている。形式的に挿入されているように見受けられる場合もあるが、臣民のために領主としての振舞いを律してくれるよう、真摯で切実な調子で訴えていることも決して少なくない。その一方で、7つの禁じられた術に関する説明はまさしく微に入り細を穿っている。禁術から遠ざかるようにと言いながら、禁術を実践するための手引きをしているような印象さえある。これまでの研究もこの二律背反的な態度に当惑して来た。以下、代表的な解釈を2つ挙げる。

これはいわゆる「廷臣の如才なさHöflingsgeschmeidigkeit」で、注意を喚起するという「公務」を果たしつつ、辺境伯個人の好奇心も満たすという配慮の成せる業で、こういった二面性がハルトリーブの宮廷での目覚ましい出世を可能にしたのだとするのがWolfram Schmitt¹⁷⁾の解釈である。特にこの場合は、バイエルンの宮廷と辺境伯、引いてはブランデンブルク選帝侯との関係をより親密にしておきたいという外交的・政治的配慮もあったのではないかと。それに対して、これは秘術に関心のある辺境伯に真摯に注意を促すために書かれたもので、伯に秘術の実践法を伝えるためのものなどではない、この著作は「警告Warnung」と「解明Aufklärung」が結合したもので、秘術の実態を細かく説明し正体を明らかにすることによって、はじめてその禁じられた術を回避することが可能になるのだと主張するのがFrank Fürbeth¹⁸⁾である。Fürbethはさらに、ハルトリーブはこの著作以前の時期から秘術には批判的な考えを持っていて、『名前占い』、『月占い』、『点占い』、『手相占い』などはこれらの術の実情調査のために集めていた資料に過ぎず、彼自身の翻訳でもなければ著作でもない可能性が高いとしている。Fürbethは更に、ハルトリーブにとっての秘術は研究者にとっての研究資料のようなものだったと言っているが、第II部の7つの術の詳細な説明は観察報告に過ぎないと割り切るにはあまりにも生々しく臨場感に満ちている。Fürbethの研究の功績は、第I部の7つの問いと答えがスコラ哲学の討論形式に基づくものであり、特に答7の「悪魔は誰の心も強制できないが、人を誘惑して人が同意すると、その人が気に入ることをでっち上げてそれを教え込むのだ」が、第II部で繰り返される警告（あらゆる禁術の背後には悪魔が潜んでいる）へと通じていることを指摘している点である。そのFürbethは第I部の議論を殆ど取り上げないSchmittを批判しているが、彼自身も第II部は全体の4/5を占めるものの、主に民俗学的視点から検討されるべきものだと踏み込むのを避けている。その一方でSchmittは、『名前占い』、

15) 7つの禁じられた術のあとに続くはずの83の術に関する説明はなされていない。『禁術全書』を伝えるどの写本も同様なので、元々のこの部分は書かれなかった可能性が高い。

16) 註14参照。

17) Schmitt, Wolfram: Hans Hartliebs mantische Schriften und seine Beeinflussung durch Nikolaus von Kues. Diss. Heidelberg 1962.

18) Fürbeth, Frank: Johannes Hartlieb. Untersuchungen zu Leben und Werk. Tübingen 1992.

『月占い』、『点占い』、『手相占い』といった秘術著作群を極めて詳しく解説し考察しているが、『禁術全書』でのハルトリーブの転換の理由を、当時ちょうど枢機卿としてドイツ南部を訪れていたニコラウス・クザーヌスの教えに触れたためとしているのには、やはり唐突の感を否めない。秘術に関する知識を持ちながら、距離を置くようにしていたクザーヌスの態度にハルトリーブは感化を受けたはずだと言うのだが、ハルトリーブの著作や手紙類にクザーヌスの名前が登場することが一度もないため、この議論には雲をつかむような印象がある。

『禁術全書』が書かれた1450年代はいわゆる魔女狩りの開始時期に当たっており、ハルトリーブも1440年代にローマで魔女が火刑に処せられるのを目撃したと記している（第33節）。自分に嫌疑がかけられないためだとすれば、禁術に対する警告を頻繁に記しているのも頷けるし、そこに辺境伯の名前があれば、教会からの追及を免れられる可能性がより高まることも想像できる。しかしこの自己防衛という説明を含めて、上記の解釈全般に共通しているのは、態度の一貫性という前提である。ハルトリーブは最初から禁じられた術には距離を置いていたのだとするFürbethは元より、『禁術全書』での変化を一貫性のない不自然なものとなし、そこに特別な理由（宮廷に仕える者としての立ち居振る舞い、枢機卿との出会い、あるいは取り締まりに対する自己防衛）を読み込もうとする態度も、結局は近代的な心性から15世紀の世界を見ていることにならないだろうか。

ある事柄を体系的に詳細に述べておきながら、一転してその価値全体を否定するという論法は、ハルトリーブの別の作品（翻訳）にもある。アンドレアス・カペラスの『恋愛について』では、著者がある貴族の若者に対して愛の本質、条件、在り方について詳しく述べ、愛を得るための総計で9つの会話例を総覧的に述べているが、最後の巻で、恋愛に労力を傾けるのは浪費に他ならないので、恋愛の諸相を知り尽くした上でそれを避けるのが最上だという忠告をしている。このような同じ著者による前作ないし前言撤回は、プラトンの『パイドロス』に言及されているステシコロスの例¹⁹⁾以来「パリノーディア」（自己撤回、Palinodie）と呼ばれている。13世紀フランスの『薔薇物語』（ギョーム・ド・ロリスとジャン・ド・マンによる）や14世紀イングランドの『カンタベリー物語』（ジェフリー・チョーサーによる）といった仏・英の著名な例に比べて、ドイツ中世文学では目立った類例はないが、カペラスの翻訳を行ったハルトリーブにはもちろん周知の論法であっただろう。これが、秘術の詳述と秘術の否定が同居している『禁術全書』にどの程度の影響を及ぼしたかについては確実なことが言えないが、15世紀には、アビ・ヴァールブルクが「論理と魔術がひとつの幹に接ぎ木されて咲いていた」²⁰⁾時代と呼んだ16世紀前半

19) 「『イリウー・ベルシス（トロイアの略奪）』という作品の中で、女神ヘレネを「二度も三度も結婚し夫を裏切る女」と書いてその怒りにふれ、失明したが、『パリノーディア』の中で「トロイアに行ったのはヘレネ自身でなくヘレネの幻像である」と取り消すことによって罪を償い、視力を回復したという言い伝えがある。」プラトン：『パイドロス』、藤沢令夫訳（岩波文庫 2010年）、193頁（訳者註）。

と変わらず，というかそれ以上に，近代的論理とは異種の心的構造があったように思われる。更に探索を続けたい。

20) Warburg, Aby: Heidnisch-antike Weissagung in Wort und Bild zu Luthers Zeiten. In: Werke in einem Band. Auf der Grundlage der Manuskripte und Handexemplare. Hrsg. und kommentiert von Martin Treml, Sigrid Weigel und Perdita Ladwig. S. 424-491. Berlin 2010 [1920]. Vgl. S. 427. 「ひとつの幹に接ぎ木されて咲いていた auf einem Stamme geimpfet blühten」はJean Paulの „Vorschule der Ästhetik“, § 50からの引用。